

特集 あきつぽい子はいない

●出典…「育てる」通巻144号 昭和55（1980）年6月25日発行

親の因果が子に報い、か

川田 藤太郎（元中学校長）

「うちの子は、あきつぽくて困ります。先生、何とかありませんでしょうか」などと涼しい顔をして訴えられるとき、何ともやり切れない気分と、なかばあきらめ気分とがいきりまじった一種複雑な感じで、発言者の顔をじつとみつめることがしばしばある。

かわいそうに、と思うと同時に、救われんなあ、と子どもに同情したくなるのだから妙である。いわれる子どもの側にたつて憤りさえ感じてくる。何をもつてあきつぽい子と断定できるのか、きめつけられる子ども

もの側にたつて考えてあげたことがあるのだろうか、と……。

本来子どもは、大人がいうほどあきつぽい存在ではない。また移り気一辺倒のしろものでもないと感じている。赤子、幼児、児童、生徒と成長段階によって、それぞれ興味や関心を呼ぶ対象や行動様式はちがっているが、決して無関心、無気力、無感動の生物ではありえないものである。

ある種の人たちにかかる、これらの子どもたちはあきつぽい性質をもつてこの世に生まれついたかのやうにきめつけられてしまうが、とんでもない誤りであるとわたしは考えている。

あきつぽくすることに生きがいを感じてやっている



子どもが何人いるだろうか。

先生がたは「彼は授業中うるさくて全く困った奴だ」とよくグチをこぼすが、もう一歩つつこんで、実は、うるさくしている彼の方がよほどグチをこぼしたい境地に追いこまれているのだというところまで、理解してはくれないのが現実である。相手かわれども主かわらずに、チンプンカンプンの授業に、五時間も六時間もつきあつていかなければならない身にとつて、じつと我慢のいい子でいようとしても、それはムリというものではなからうか。

「一時間のうち一分や三十秒ぐらいは、ぼくにもわかり、答えもできる場面をつくってくれてもいいじゃない」と要求したくもなろうというものである。

「予習も復習もしていない当方としては、ゆめそのような要求は申しあげられませんが、つついツイタズラもおっぱじめてしまふというなりゆき、おわかりいただけましようかな？」と聞き直られても、グウの音も出ないのではあるまいか。

子どもたちは結構がんばっていると見たい。

A君のこと

A君は中学一年生であつた。六年卒業時の学業成績は、五段階評価ではほとんどが1で、2がチラホラという程度。例によつて、授業中は五分とほじつともたない、と、各先生が異口同音に保証してくれる生徒であつた。

そこでクラブ活動希望編成に際し、担任は彼を園芸クラブにさそい、そこから師弟同行の作業が始められた。開校間もないこの学校では、花壇のコンクリート枠づくりからの作業である。砂利や砂はこび、水はこび、コンクリート練りから流し込み仕事と、毎日六時間の授業終了から日没間近までの重労働であつた。

先生の大声が時々爆発する中で、あの彼が、ほとんど休む間もなく、大粒の汗を流しながら仕事に懸命にとりくんでいる。教室の彼からは想像もつかない別の彼がそこにいた。もちろん彼をとりまく数人の生徒も同じように泥まみれ、汗まみれの仲間であつた。

十数日後、花壇づくりの完成祝いに、校長がポケットマネーで差入れた一ぱいずつのラーメンは大好評であつた。「こんなにうまいラーメン、食つたことないよ」と彼がいった。

校長や担任と晴れて用務員室でラーメンをすすつたという一種の特権意識が、汗を流したあとの空腹感により一そうの味つけをしてくれたのかも知れない。

この年の夏は、異常といわれるほどの炎天がつづいたが、四十日間の長い夏休み中、嬉々として灌水作業にはげむ彼の姿が見られなかった日は一日もなかった。また担任の姿も、ほとんど彼の姿と重なっていたのである。そして夏の花々が干天にもめげず見事に咲き競っている花壇がそこにあつたことは、もちろんである。

二学期以降の彼の教室での姿も、めだつてよくなつていった。先生の話は何とかうけとめようとがんばっている顔があつた。よみがえつた自信の一端がかいまみられる彼であつた。

どうしたらよいか

(1) 現状をしっかりと見定めよう

あきつぽい子はいないと同時に、あらゆることに興味をむけ、すべて満点で対応できる子どもでもない。もしこのような子どもがいるとすれば、それは化物だ。あきつぽい子はいないが、あきつぽい子にさせられて

しまった子、あきつぽく育ててしまつてあわてている親や教師がたくさんいることは現実である。

子どもの責任だ、親だ、教師だ、と責任のなすり合いをしていても、子どもは救われたものではない。

とにかくどうしたらよいかを、あきつぽくさせられた子ども、なっている子ども、親、教師、社会環境までふくめて、ともに考え、ともに解決への努力をせねばなるまい。みんながじぶんの事として、力を結集せねば救いはない。

(2) なぜ、どこで、こうなつたかを考えよう

何がいけないのかをしっかりとおさえることから始めよう。

(3) 具体的努力目標をしっかりとつかまえよう

親と子でよく話し合つて、できること、できないことを理解する。子ども自身で自発的に決定するように誘導したいものである。そして、やれたか、やれなかったかの物差しをきめ、子ども自身で評価できるようにしておくのがよい。

(4) 失敗の奨励

たつた一回の挑戦での成功は当然誉められてよいが、

九回の失敗の方が、より価値の高い努力点が与えられることを自覚させることができれば、大成功である。親子ともども涙してはげましあう場がつくれたら、と念じる。

(5) 強制力の確立を心がけよう

あきっぱい性質を治すには、当然そこに矯正力（強制力）が作用しなければならぬ。幼少時代は他律的力（しつけ）が主となるが、長ずるに依じて子ども自身の内なる力（自律的強制力）を育てたい。

賞金をかけ、好餌で釣ろうとすることもあるが、これが物である限り、小を得れば大をのぞみ、その場かぎりの満足のみで終わり、永続力にはならない。

成功のよこび——「やったあ」という実感こそが、より質の高い自発的学習意欲（やる気）をふるいおこさせるものなのである。うれし涙をうかべた親の笑顔、やさしく強くだきしめられた親の腕の力、子どもにとつてこれらに優るはげましはほかにない。「よくやったじゃないか」と両肩をつかんでくれた親の手の重み、温かさにかなうものはあるまい。大人は照れずにやってあげることだ。親から信頼され期待されているとい

う安心感ほど、子どもの心を安定させるものはない。

要は、おたがいの心と心でうなずきあえる間柄こそが、いかなる困難にもたえ、悪戦苦闘しながらも険しき山坂をも乗り越えて行くファイトを生み出す原動力となるものと確信している。親子師弟ともに汗し、ともに行ずる日々の営みこそが、たがいの生きがいになり、がきをかける根源である。

やる気をひき出す

宮崎 英雄（杉並区立杉並第七小学校 教諭）

よさを認めてのばす

親としては、その子の将来のことを考えれば考えるほど、こうなつてほしいという期待が大きくなりがちです。期待が大きくなればなるほど、よいところより悪い点ばかりが気になります。また、目立たない子どもは、これといって、人に迷惑をかけたりしません。「あの子は、特徴のないのが特徴だ」と評価されます。やがて、影のうすい、忘れられた存在になつてしまうことがよくあります。

ところが、よくみると、どんな子にもよいところがあり、すばらしい思いつきや、言動を示します。その時、よい点を認めて、ほめてやるのは親の役目です。悪いこと、いけないことばかり、がみがみやられては、だれでもたまりません。一週間も二週間もたつてからほめてやつてもだめです。一般的に「よい子ね、おრიこうさんね」というほめ方も感心しません。その場で、具体的に「これがすばらしい」と、はっきり示してやることです。字の書き方、爪の切り方、おそうじのやり方など、なんでもいい、はっきりおさえて認めてやることです。親にほめられ、認められて、気持ちが安定し、みずからやろうという意欲が生まれます。

子どもの活動力を高める

家庭生活は便利になつて、少なく生んでいじに育てる、雑用などいいつけない。それがはたして子どものためでしょうか。イギリスの教育学者は、日本は、子どもの天国だ、そして、日本の子どもはかわいいそうだ、といっています。家庭は、いちばん小さい社会です。家族の一員としての自覚は、下宿人のような生活

の中からは生まれません。自分は、この仕事を通じて、家族の一員としての責任を果たし、この役割をなしとげることによつて、みんなのために役立っているんだという経験がだいじです。この経験をもとに、社会に対する責任、集団や仲間に対する責任と自覚が、培われるわけです。お手伝い、お使いで親の手がはぶけて助かるなんていうことはありません。

わたしは、学校でも、トイレのそうじでも、机こしかけの運搬でもなんでもやらせるから、どうか家庭でも、おうちの事をどんだんやらせてくださいと、保護者に訴えつづけてきました。学級の係活動、学校全体の部活動をはじめ、一人一鉢の栽培活動もつづけています。通知表には、家庭の仕事が、どの程度できたかを、父母に採点していただく欄を設けています。家庭という集団生活をしている以上、仕事がないということはありません。玄関はき、新聞とり、雨戸しめ、なんでもけつこうです。

やる気をだせ、意欲をもて、と口でいくらいつても、何の役にも立ちません。子どもに仕事を与え、活動を育てる指導はできる。この活動をもり上げるこ

とによって、意欲的な活動的な子どもが育つものだという確信をもっています。

親のすがたをみて育つ

かつて、あかつきの超特急といわれ、現在、陸上のコーチをして、有名な選手を育てている吉岡氏が、ある中学校の指導にきました。「どうも、うちの生徒は意欲がなくて」というと、即座に「まず先生自身が意欲を示すことです」とだけいったそうです。仕事に対する全力投球、真けん親の生活態度、これが、無言の教えですね。

都会の子いなかの子

中山 昇一（荒川区立第三瑞光小学校 校長）

昨秋、私は、複式学級における理科教育の実態について、調査を依頼され、新潟県のへき地の小学校分校を訪ねたことがあります。

山また山に囲まれ、山間のわずかばかりの田畑にたよって生活している山村でした。その自然環境の中で

暮らしている子どもたちの姿には、子どもらしい素朴さと、ひたむきなたくましさを感じました。

複式学級ですから、理科の授業でも、三・四年生が同じクラスの中で、それぞれのグループにわかれて、ひとりの先生のもとに、学年相応の学習を同時にすることになります。先生の課題に対して、互いに考えを出し合い、実験を進め、結論を導き出すという学習の取り組み方です。驚いたことに、オーバーヘッドプロジェクター（OHP）のような近代的な機器を子どもたちが、自分で操作しながら、自作のシートをもとに話し合いを進めるといった場面にも接しました。

ふと、廊下や教室に眼を向けると、黒びた床板の木目が浮き上がるほど、磨き上げられているではありませんか。また、男の子の大部分は素足で平気な顔をしてやっているのを見かけました。

授業を終えた子どもたちは、私に笑顔で親しみ深く話しかけ、「さよなら」を何度も繰り返し、手を振りながら、校門から坂道を駆けおりていきました。

都会では味わえない自然の楽園で生活している子どもたちの姿が、大変印象的でしたが、冬の深い積雪や

吹雪の中を登校してくる子どもたちの自然へのいどみを担任の先生から伺って、いつそう感動いたしました。

山間の自然の移り変わりに順応しながら、自然と共に生活していくうちに、たくましい生活力が身についていくのでしょうか。

越後人特有の粘り強さや行動力は、こうした自然環境に影響されているところが大きいのでしょうか。

さて、ひるがえって、都会の子どもたちを見ると、全く、自然から感得する機会に恵まれていないことに気づきます。環境条件が違うから仕方がないことと、あきらめてしまうのは、あまりにも不幸なことです。

広大な自然の中で、生き生きと遊び、学ぶ機会を何とか取り戻してやる必要があります。学校が臨海や林間学園を行うのも、この目的が第一でしょう。施設の収容能力や諸経費などの条件を整えば、二泊三日などと言わず、もう少し長期の生活をさせてやりたいものです。ホームシックをのりこえ、自然の中で、多少の不自由さをがまんしながら、素朴な生活を味わうことによつて、自然の豊かさを感得し、自律的な生活態度も養えるのではないのでしょうか。あまりにも便利にな

り、過保護になりがちな都市の生活から、子どもたちを一度つき放してみたくあります。

いよいよ、夏休みです。海や山にばかり連れ出すわけにもいかないでしょう。家庭でできる自然への親しみはないのでしょうか。都市の恵まれない環境ですが、身近に見られる草木や虫を育てながら、成育の様子や環境条件との関係を調べることもできます。また、くふうをこらして、動くおぼちゃや、身のまわりの改良品を作るのもよい機会です。

一木一草から、自然のしくみの妙味を知ったり、自分で考え、くふうしながら、工作を完成させる喜びは夏休み中の大きな収穫です。

自然に対する興味や関心、そして、それにたち向かう粘り強い根気強さは、こんなことから養えます。

最後に、育てる会のミニ行事に参加した子どもたちの作文を紹介します。どの作文からも、歩き通したよろこびや達成感をみることができます。子どもたちに、このような「やり遂げる」体験を数多くも

たせてあげたいものです。

子どもの作文から——冬山登山教室——

◆小2男子

ぼくは山をのぼるときとてもつらかった。

つかれてつかれてもうたおれそうになったとき
大たけ山のちようじようについた。

いそいそでおべんとうをひらいた。

たべてからあと十四キロがもんだいだとおもいな
がらしゅっぱつした。

小さい山をのぼったりくだったりしてすすんだ。
だらだらしながらすすんでいくのはとてもつらい。

あとひといきだとおもってばかり山をのぼりは
じめた。

こんどはだらだらしないからまだよかった。これ
でもかとおもった。

しばらくしてからまたあるきだした。もうじゅう
りぎもちかいとおもってがんばった。

じゅうりぎについたときはたましいがぬけたみ

たいにふらふらだった。

おじさんに「よくがんばったね」といわれたときは
うれしかった。

またのぼってみたいとおもっている。

◆小4男子

ぼくは、十二月三日に奥多摩山地に登った。

新宿から「快速」で立川までいった。そのあいだ
「育てる村」でのA君がいたので、しゃべっていたら
すぐ立川についたような気がした。立川から、B君が
乗車した。

立川から、青梅線に乗車した。

御岳山に登った。

次に大岳山の頂上をめざしてのぼった。切りたつた
がけ、急な坂を、ぼくはフーハー、フーハーいいなが
ら登った。まわりのけしきは、あまりみられなかった。
やつと頂上についた。ぼくは深呼吸をして、思わず

「ワー」と、いいたかった。

おべんとうをたべた。とてもおいしかった。

大岳山をおりて、馬頭刈山に登っていった。上りは

急でも、かんたんに登ったが、下りの方が苦しかった。
また、奥多摩山地に登りたいと思った。

◆小4女子

五時きつちに、めざましになった。
そうつと洋服にきがえて下におりた。

下のまどを見ると、まだまつくらでした。

山登りは初めてなので、私の気持ちは、うれしいよ
うな、こわいような気持ちでした。

ご飯を食べて、くつをはいてから出かけました。

私は、Cさんたちといっしょに、新宿のしゅうごう
場所に行きました。

そこから電車に乗って、バスに乗ってやつとついた。
ケーブルカーに乗って、すこし歩きはじめた。

私たち、四年生をうけもつてくれた先生は、とても
やさしい先生でした。

右がわは、山で、左がわは、がけで、もう少し左が
わによるとおつこちそうでした。

すこし歩きながら、せんとうの人は、もう私より、
ずうつときぎにいつているのかな、早くせんとうの人

のところに行きたいなと考えながら歩いていました。

もうすぐで、ふじみだいというところまできました。

そこは岩だらけで、やつとついたのかな、と思つて
上がるとまだあるので、私はがっかりしました。

やつと、ちょう上についた。その時は、もうくたく
たになつて、もうたてないくらいでした。

空気が、とてもおいしかった。私は、ちよつとか
ぜっけなんだけど、ふだんは、せきがでるんだけど、
ちょう上についた時は、ぜんぜんでなかった。どうし
てなんだろう、と思いました。

おべんとうを食べおわつて、ちょう上を出発しまし
た。

私たちは、先生といっしょに、ばずかり山に一番に
つきました。私は、とてもうれしくなりました。

ほかの先生たちをそこでまつため、私たちは、じゅ
う分休みました。そこから下におりました。

しばらく行くと、川があつて、とてもきれいな水で
した。かわいい水のながれる音がしました。

私の足が、とまると、ふるえるようになってしま
いました。すこし歩いて、やつとバスのていりゆう所に

つきました。

バスに乗って電車に乗ってやつとついた。あいさつをして、わかれしました。とても足が、いたくて、のがからからでした。

来年も行きたいな、と思いました。

◆小4男子

道は、あまりけわしくなかったけれど、登りで、ひどく足がいたくなった。

ぼくは、長野で、よく山に登っていたので、足には自信があつたけど、東京に来てから、ほとんど山に登っていないせいか、すぐ足がいたくなってしまう。それで、自信がなくなってしまった。

だんだん道がけわしくなり、息ぎれがして足がいたくなつてしまった。「やつぱり、こない方が良かったかなあ。家にいれば、今ごろ、ゆつくりしていただろうなあ」などと思った。

道は登るほど歩きにくくなった。でっかい岩がつき出ていたり、すべりそうであぶない階段がある所もあつた。手を使わなければダメな所もあつた。

やつと、ちょう上についた時は、ほつとした。上からまわりをながめると、山が四方八方に見られた。家がかたまって見え、手の指でつぶせそうだ。とてもスーッとして、つかれなんてふつとんだ。食べたお弁当も特別においしかった。

馬頭刈尾根は、とても長く、登ったり、下つたりの所だった。母の言っていた通り、まったくバカ尾根だった。両がわの木は、葉がみんな落ちてしまつて、道は落ち葉でいっぱいだった。下り坂になると、すべるほどだ。まわりの山は、もやの様なものがかかつていて、近くの山しか見えなかった。

と中で休んでいたのも、前の人とはなれてしまった。後ろの人ともはなれてしまつて、友だちになつた五年生の人と二人きりになつてしまった。かまわず下りていくと、じぐぎぐの下り坂になつて来た。道はばも広くなつてきた。

下についたら、もうバスは出ていて、次のバスまで歩かなければならなかった。

でも、とても楽しい一日だった。

再掲載を受けて――

子どもを飽きさせない魅力ある活動を

山本 光則（育てる会 常務理事）

富山県南砺市内の子どもたちが参加した2泊3日の「夏休み自然体験キャンプ」が昨日終了した。子どもたちは素直で平和で他人を押しつけるような姿もみられず、僅か3日間であったが家族のようなほのぼのとしたものを感じられ、もう少し長く一緒に過ごしたいと思った。

かつて10年間にわたり、漁村や無人島をフィールドに、夏休みを利用して瀬戸内の子と広島市内及び周辺地域の子の4日間の交流活動を担当させていただいたが、同様に後ろ髪引かれるような最終日であった。このような子どもたちともう少し長い期間活動ができれば、みなで力を合わせて新たな海の活動に挑むことができるのではと思った。

ところで、夏の長期キャンプといえば、私は15年前前

まで南信濃（長野県売木村）長期班のお手伝いに出かっていた。8月の始めからお盆過ぎまで2週間以上の日程で、希望者が多く35名前後を受け入れた。参加する子どもの目的はさまざまで、「大物を釣りあげる」「溪流を遡って滝を乗り越える」「ナイトハイキングで20キロ歩く」「河原の野営キャンプ」「火打ち石探し」等々、自然体験を楽しみに毎年参加する子が半数近くいたように思う。

一方、「標高800メートルの高原でのんびり過ごしたい」「ゲーム漬けの生活になると半ば親に強く勧められた」といった理由で参加する子も少なくなかった。モチベーションの違いにスタッフ一同頭を抱えながらも、それぞれの子どもが楽しく過ごせるよう毎日多くの選択活動を提示して、楽しい思い出を作り帰宅してもらうよう努力した。

そんな中で今でも忘れることができない活動がある。魚釣りをしながら溪流を遡ると、小さな滝や岩を滑るように流れる川の上に木立がトンネルのように覆いかぶさった広場があった。早速藪をかき分け土手をよじ登るとセンター前の広場が見え、こんな近くに魅力的な場所があったんだと気づかされた。私はすぐに疲れて館内で

ゴロゴロしている子ども数人に声をかけ連れて行った。木立で光が遮断されているが、子どもたちは岩に囲まれた流れは変化に富んでいて面白いと言った。その後、遠方に出かけて帰ってきた子どもたちも誘ってみると、やはりみんな反応がいい。

そこでフロンティア班と名付け、毎日のようにこの河原を開拓する活動を始めた。まずは河原のスギ林の持ち主にお願ひし何本か倒させていただいた。すると眩しい光が林に差し込んだ。次に河原の笹を刈り斜面に丸太の階段を作り、藪を刈って道を作った。特に選択活動がない日でも、朝夕の少しの時間を使い遊び場づくりに没頭した。流れの真上にあった大木の枝にロープを結び、ターザン遊びをしながら川の深みに飛び込むことが出来るようにもした。こうして2週間はあつという間に過ぎ帰る日が来ると、「また、来年も続きをしよう」と子どもたちは約束していた。

翌年、フロンティア班に参加したメンバーが集まってきた。毎日フロンティア活動に没頭し、徐々に広場が大きくなりテントも張れるほどになってきた。さらに翌年も同じように、センター前の河原で遊び場づくりに没頭

した。この活動はいつたい何年続いたのだろうか。小学生だった子どもが中学生になっても参加し、高校生になつてからはサブリーダーとしてやってきた。今では夏の売木村溪流活動広場として定着し、みんなが楽しく遊んでいる。

さて、本誌再掲載の特集は「あきっぱい子はいない」であるが、仮にあきっぱい子や意欲的に行動しない子ども、魅力を感じることに遭遇すれば夢中になれる一例として、ありし日の活動の様子を紹介させていただいた。私たち指導者は数多くの魅力ある引き出しを持ち、子どもたちと向き合うことが求められていると再度確認する機会となった。

余談になるが、兵庫教育大学の教授でおられた山田卓三先生は、幼少期における原体験教育を提唱し実践指導をされておられた方だ。20数年前のことであるが、先生の子育てについてのお話を拝聴する機会があつた。「男の子は遺伝子学的にあきっぱいなので、高価なおもちゃを買って与えてもすぐにあきてしまう。だから棒きれでも持たせておきなさい」という言葉が今でも脳裏に焼き付いている。